

子どもが変われば、大人は認めざるを得ない

黒澤：今回、いしかわ特別支援学校と湯涌小学校という2つの現場で「アーティスト・イン・スクール」を走らせてみて、僕自身、ハッとさせられることが多かったんです。実は始める前はもっと「先生をどうやって説得しようか」みたいなことを考えていた節があった。でも実際には、杉江先生をはじめ現場の皆さんがものすごく協力的に動いてくださって。

特に特別支援学校に関しては、写真家のカトさんが入る前から、もう校内で情報が隅々まで周知されていましたよね。知らないのは生徒さんたちだけじゃないかというくらい。杉江先生、実際にあの現場に「異物」とも言えるアーティストが入ってみて、校長としてどう感じられましたか？

杉江：まず、札幌の事例でも言われていた通りなんですけど、「子どもたちが変わる」んですよ。そうなっちゃうと、もう校長がどうの、教育委員会がどうのなんて理屈は関係ない。子どもが変わる姿を見せられたら、大人はもうそれを認めざるを得ないんです。それが一番の正解ですから。

正直、昔はもっと面白いことを仕掛ける先生がたくさんいたんですよ。でも最近はみんな真面目なんですね。面白いことをしようって意気込んで着任してもなかなか動けない。そんな中で、アーティストという外部の人の力を借りて、「こんなこともやっていいんだ」「これが子どもたちの表現力の源になるんだ」と思えた。これは私自身にとっても、大きな「収穫」でした。

黒澤：プログラムの入り口として、6月にランチタイムコンサートもやりましたよね。あの時、杉江先生がポロッと「これ、近所の人を呼んでもいいのかな」とおっしゃった。あれは驚きました。

杉江：エントランスホールでコンサートをやると決まった時、ふと思い出したんですよ。うちの学校が開校して20年、平成18年にできたんですけどね。カトさんの写真を飾っているあのエントランスホール、あそこを作った当時の教育委員会の思いの中では、あのエントランスホールでいろんな活動が展開されることをイメージしていたはずなんです。

開校した頃は、音楽の学習発表会が開かれたり、先生たちが自分でバンドを組んで、昼休みにゲリラライブをしたりね。子どもたちがわーっと集まってくる、あの光景を思い出した。特別支援学校って、一般の学校と違って「地域」がないんですよ。いろんなところから通ってくるから。だからこそ、地域に根ざしたいという狙いがずっとあった。できるだけ地域の人に来てもらって、障害のことも理解してもらいつつ、「この学校、面白いことやってるな」って思ってもらいたかったんです。

中と外、50点と100点の関係

小林：今、杉江先生のお話を聞いていて、やっぱり「中にいる人」の重要性を痛感します。僕らみたいなコーディネーターが外から入っていく時って、正直言って、どんなに頑張っても「50点」なんです。中の事情が分からないから。でも、学校の中に先生のような理解者がいてくれると、一気に「100点」を超えて何かすごいことになっちゃう。

やっぱり、先生方は自分たちの状況を一番知っているし、保護者のことも分かっている。そこに僕らがアーティストを持っていくことで、「これなら組めるね」という話になる。今回杉江先生のような方がいらしたのは、本当に心強かったんじゃないかと思います。

黒澤：小林さんから見て、杉江先生のようなスタンスの校長先生って、やっぱり「異端」ですか？（笑）

小林：そうですね（笑）。でも、そういう「プレーヤー」が見つかり、アーティストもやりやすいし、僕らも入りやすい。現場にアウェー感がないというのは、楽しいことが生まれる一番の条件ですから。「いい先生見つけたな」と。

杉江：私も教育委員会にいたことがあるので、行政がどれだけ縦割り構造かは身にしみて分かっているんです。特に教育委員会は、なかなか面白いことができない行政組織ですから（笑）。だからこそ、現場の校長には権限があるんだから、校長判断で「いいよ、やりなさい」と言ってしまうのが一番早い。

例えばカトさんのプログラムをやる時も、我々はどうしても「分かりやすいこと」を求めがちになるんです。「絵を描く人です」「写真を撮る人です」って言えば、説明はつく。でも私が黒澤さんに言ったのは、「ずっと黙ったまま作品を作り続けていて、子どもが話しかけても返事をしないような人でもいいんじゃないか」ってことでした。

なぜかといえば、世界にはいろんな人がいる。それを学校の中に持ち込みたいんです。アーティストってよく分からないけど、そういう「世間」そのものを学校の中に見せることが、子どもたちにとってどれだけ大きなチャンスになるか。

先生たちが抱える課題と、学校の解放

小林：今の先生たちって、本当に業務的にギリギリだと思うんです。この20年で環境が大きく変わって、昔なら「1・2時間目は裏山に行こうぜ」なんてことができたかもしれないけど、今はやらなきゃいけないことが増えすぎている。英語、パソコン、それからきめ細かなカリキュラム管理。先生たちが一生懸命頑張れば頑張るほど、自分自身を楽しむ余裕がなくなっている。

昔はトップダウンで「みんな外に出るぞ！」って言えたのが、今は一人ひとりを尊重しなきゃいけない。体調が悪い子がいたらどうする、君はどうしたい、って。そうすると先生

は教える人というより、調整役（コーディネーター）にならざるを得ない。もう、外の人を入れないと回らないところまで来ているんですよ。

黒澤：札幌の事例で面白かったのは、保護者が学校の中に当たり前のようにいる、という話でしたよね。

小林：そう。授業の中に親が入って保護者の力を借りる。何かあった時も批判するんじゃなくて、一緒に解決する側に回ってくれる。

これからは、人を信用して、どんどんお願いしていくっていう方向に舵を切らないと、やっていけないと思うんです。金沢のような都市部だと、まだ「学校は閉じられた場所」という意識が強いのかもしれませんが...

杉江：それは「心のハードル」の問題なんです。教育委員会から管理職は、先生たちが土日を潰したり、勤務時間が長くなったりするのを防げと言われている。「学校は関係が煩わしい」と思っている先生だっていると思っています。

特に都市部になればなるほど、祭りのような地域の繋がりが薄れていく。でも、湯涌小学校のような場所には、まだ「太鼓」があつたり、お互いの顔が見える関係がある。そういう場所なら、先生たちだって「いいよ」と言いやすいはずなんです。

学校という「インフラ」をシェアする

小林：僕らがずっと考えているのは、小学校というのは最高の「つどいの場所」だということです。北海道でも、新しく「まちづくりセンター」なんて作らなくても、そこに小学校があるじゃないかと。

グラウンドがあつて、体育館があつて、調理室も音楽室も図工室もある。おまけに1年生が歩いて通える距離にある。地域の人も通いやすい。こんなに素晴らしいインフラを、今は先生たちだけに押し付けている状態です。朝から子どもたちがいる時間は先生が管理してもいいけど、それ以外の時間や場所を、もっと地域やアーティストとシェアしていく。

学校の中にアーティストのアトリエができれば、それだけで風景が変わりますよ。先生たちが2、3年で異動してしまうのに対して、地域の人がそこに居続ける。そういう仕組みを作っていけば、何でもできると思うんです。

杉江：ただ、公立学校っていうのは、校長が変わればダメだったことが良くなったり、その逆も起きる。そこが難しい。だからこそね、私は黒澤さんに「今年で私は最後です。でも、カリキュラムとして位置づけましょう」と言ったんです。

時間割のどこにそれを置くか。教育課程のここに位置づいていますよ、という形を作っておく。それで教育委員会に通すんです。形になっていれば、私が去った後でも、次の校長がやりやすくなります。

社会を変える原動力として

小林：この「アーティスト・イン・スクール」という活動は一番最初は2001年の帯広から始まりました。当時は200校に電話して全部断られた。でも、冬に地域の人たちがグラウンドに水撒いてスケートリンクを作る、その隣でアーティストが何かやっている。そんな光景から始まった。

それが今では、単なるアート体験を越えて、学校に居づらい子の「居場所」になっている。保健室登校の子が、アーティストの周りでふらふらしている。先生たちも、同僚には言えない愚痴を僕らにこぼしていく。学校が「一枚岩」じゃないからこそ、僕らみたいな外の人間が入ることで、みんなが「個人の顔」に戻れる瞬間があるんです。

杉江：障害のある子たちはね、社会を変える原動力なんですよ。彼らが世の中を照らす光になるんです。入学式や卒業式で、私はいつも言っています。「あなたたちが社会を変えるんだから、ちゃんと自分の意思を表明していかなきゃならんよ」って。

アーティストが彼らの中から何かを引き出してくれる。それと同時に、健常者の人たちが彼らを知る。そういう場所を、学校の中に作っていく。それが私の狙いです。教育課程に位置づけるっていうのは、単なる事務作業じゃない。この活動を「日常」にしていくための、私の最後の仕掛けなんです。

黒澤：今日は、本当に現場の生々しい言葉を聞くことができました。アーティストという「好奇心を失わない大人」が、学校という場所に一石を投じる。それが波紋となって、先生や子ども、そして地域を少しずつシャッフルしていく。

今日のお話が、皆さんの中で何かの「材料」になれば、これほど嬉しいことはありません。長時間、本当にありがとうございました。